



(京都東南部)

滋賀・関津遺跡

せきのつ

1 所在地 滋賀県大津市関津一丁目

2 調査期間 11003年(平15)4月～11004年3月

3 発掘機関 (財)滋賀県文化財保護協会

4 調査担当者 大崎哲人・藤崎高志

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 繩文時代～室町時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

関津遺跡は、琵琶湖から流れ出た瀬田川と信楽盆地から流れ出た大戸川の合流点の南、田上山系北麓の標高約九四四mの低丘陵部から

標高約八三三mの河川氾濫域にかけて立地する。1100

二年、県営圃場整備事業に伴う事前調査により新たに発見された遺跡である。

(1) 発掘調査の結果、繩文時代前期の有舌尖頭器、後期の土器溜まり、晩期の土器棺、古墳時代の流路、飛鳥時代の堅穴住居・溝、奈良時代の掘立柱建物・溝・流路、鎌倉時代の掘立柱建物・井戸・土壙墓・溝などが検出された。飛鳥時代中期の溝からは、「畔」(岡の異体字「畔」、もしくは「四十」か)と墨書きされた土師器の杯が一点出土している。また、鎌倉時代の遺構からは、大和からの搬入品とみられる瓦器を中心に、輸入陶磁器も多数出土している。

木簡は、遺跡北端の調査区で検出した流路から出土した。この流路は、幅約四m深さ約〇・九mで、大きく二層の堆積が確認され、その上層で木簡が検出された。上層からは九世紀末頃の土師器や黒色土器、一〇世紀前半の回転台土師器が伴出しており、木簡は九世紀末から一〇世紀前半にかけてのものとみられる。また、下層からは、奈良時代後半の須恵器や土師器のほか、和同開珎一点、神功開宝一点、人形代一点、墨書き土器数点(「本」、「東」ないし「東」など)が出土している。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「大日奴良田□□水廿五日

〔上溜カ〕

七月廿四日

(130)×(19)×2 081

上端と左側面は原形を残しているが、右側面は縦に人為的とみられる割りが入る。また、下端部が強い力で折られ欠損しているほか、

中央付近の二ヵ所で折られているが、完全に分離はしていない。お

そらく廃棄段階で折られたものであろう。やや下部が細くなつてお
り、下端が尖っていた可能性がある。

墨の残りは比較的良好で、表裏とも同一人の筆跡とみられる。表
面の上から六・七字目の二文字は、墨痕が薄いことと折れによる剥
離により、訛読困難であるが、赤外線写真により六字目は「上」で
ほぼ間違いないと考えられる。七字目については赤外線写真により
さんざい偏が見え、旁の左半分は「留」の左半と解されるところか
ら、「溜」の可能性がある。

したがつて、文章としては読み通せないが、「大日の奴の良田へ
は、上の溜め（池）の水を、この二五日に入れる」あるいは、「二
五日に止める」という意に解することができるのではなかろうか。
とすれば、木簡を現地に掲示した告知札と推定することも可能であ
る。裏面の日付は、こうした告知がなされた日時で、おそらく用
水の取り口に突き刺して使用されたものであろう。また、「大日の
奴」とは、「大日（如来）に仕える」の意で、その田とは、大日如
來を祀るお堂の維持のために置かれた田地ではないかと考えられる。

遺跡の北一・二kmの瀬田川左岸に、大日山なる小山があり、大日
古墳群という後期古墳群もみられるが、その山頂に「大日觀音堂」
と呼ばれる祠が現存し、「近江輿地史略」は、「大日堂」には、行基
菩薩が造立した大日如來を祀るとする。木簡に見える「大日の奴」

に関わる可能性がある。

大日如來の信仰がわが国で広がるのは、九世紀以降とされており、
木簡の出土遺構の年代とほぼ一致する。そして、この地域は近年ま
で溜池灌漑の盛んな地域であり、本木簡は、今後平安時代前期にお
けるこの地域の開発と用排水管理の実態を明らかにするうえで、重
要な手がかりとなるであろう。

（1～7 藤崎高志、8 大橋信弥（安土城考古博物館））

